



文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

Title	The Oral Proficiency Interviewに表れた談話の分析：中級と上級の談話の型の違いについて
Author(s)	斉藤, 真理子
Citation	文化女子大学紀要. 人文・社会科学研究 1 (1993-01) pp.31-41
Issue Date	1993-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10457/2461
Rights	

The Oral Proficiency Interview に表れた談話の分析

——中級と上級の談話の型の違いについて——

齊藤 真理子*

Analysis of the “text type” in the Oral Proficiency Interview

——the difference between intermediate and advanced levels——

Mariko Saito

要 旨 Oral Proficiency Interview (OPI) は、機能、内容、談話の型、正確さの面から会話運用能力を客観的に評価する方法である。本研究では、OPI の際に抽出された段落を分析し、談話の型の上達過程について考察した。OPI の談話の型の基準では一まとまりの内容をもつ段落で物事について話せるようになると上級であるが、中級と上級の違いはどのような言語形式に表れているのだろうか。中級の上と上級の下の段落の違いを、接続語句、指示詞、複文、文末表現について分析した。その結果、中級の上では、やさしい接続語句を多用する傾向があり、照応用法の「ソ」は使えず、全体の文に占める複文の割合も少なく、文末はバラエティがなく訴えかける力が小さい。上級の下では、使える接続語句に変化がみられ、特定の指示詞の多用は見られるが照応用法の「ソ」が使えるようになり、複文の割合が増える傾向があり、中級者より文末表現にバラエティが出てくることなどが概観できた。

1 OPI における段落¹⁾の抽出とその評価

会話能力の客観的評価は、語学教師の苦勞するところである。面接（インタビュー）試験、役割を演じる（ロールプレイ）試験、皆の前でするスピーチ試験、複数の学習者による話し合い試験、学生が自分でテープに録音する試験、などいろいろある²⁾が、採点者により評価が異なってしまうなど評価の客観性が大きな問題となる。

OPI は、American Council on the Teaching Foreign Languages (ACTFL) が開発したインタビュー形式による会話能力試験である。これは一定期間の学習の目標到達度を測定するための学力テスト (achievement test) ではなく、能力テスト (proficiency test) である。ACTFL では日本語を含めて12の言語において OPI の普及に努めているが、基本的な考え方は、目標言語をいかに効果的に適切に現実生活場面で駆使することができるかを客観的に測定することにある。

インタビューには、warm up, level checks, probing, wind down の4つの段階があり、学習者³⁾の興味に応じたいろいろな分野の話題を取り上げながら会話能力の下限と上限を探る。ここで大切なのは、会話運用能力がほとんどなく単語文でしか話せない初級レベルの学習者も含め、学習者が

* 本学講師 日本語教育

まとまった話をするように仕向け、段落を抽出することである。単なるおしゃべりに終始するインタビューは評価不能なものになってしまう。学習者が自分のもてる言語能力を精一杯使って何かについて語る状況を作ることが肝要である。そして、どういう内容のことをどの程度話せるのかが評価の手がかりとなる。この時、テスターはインタビューを録音するのみで、何もメモはしない。

ACTFL の評価基準には機能・タスク、内容、談話の型、そして正確さの4つの面でそれぞれのレベルでできることが定められており、その基準に照らし合わせ、学習者がどのレベルに相当するかを資格を持ったテスターが評価する。レベルは初級、中級、上級、超級の4つの上位レベルがあり、初級と中級にそれぞれ3つ、上級に2つの下位レベルが設定されている。教育ある目標言語話者を超級として、この9段階に評価するわけである。

本稿で取り上げる談話の型について、OPI トレーニングマニュアルでは、量的構造的観点から分析し、単語のみあるいは暗記した文レベルは初級、自分で文を創造することができるが、不連続な文章 (discrete sentences) のレベルが中級、段落 (paragraphs) でまとまったことを話せるレベルが上級、連段落 (extended discourse) で話せるレベルが超級としている。かろうじて一まとまりの話ができるようになったとされるレベル (上級の下) とまだ文が十分に段落になっていないとされるレベル (中級の上) との言語形式の違いを日本人の例を参考にしながら分析し、段落で話せるようになったとされるにはどのような条件が必要なのか考えてみたい。

2 段落が成立するための条件とは？

2-1 文章が成立するための条件

文がただ累積しただけでは段落・文章にはならない。文章が文章として成立するための言語形式にはどのようなものがあるのか先行研究を見てみよう。

池上嘉彦 (1982) は、談話を「文のさらに上に立つ言語的単位を想定して、それに与えられた用語である」と定義し、それを支える構造的な要因として、結束性、卓立性、全体的構造を挙げている。結束性は文と文との続き具合の問題であり、卓立性はどの部分をめだたせて提示するかに関するもので、全体的構造は完結した談話として期待される構造に関するものである。池上は、結束性を表す言語形式として、指示、置換および省略、語彙的手段、接続詞を挙げている。

永野賢 (1986) は、談話とは「一つづきの言語表現であり、一つの文では表現しきれない一つの事柄を二つ以上の文の連結という手続きで表現したひとまとまりのもの」と定義し、文章の基本的構成要素となる文と文の関係を接続・連鎖・統括という概念でとらえることを主張した。接続とは隣り合った文の意味の関係を言い、その直接の指標となる言語形式として、接続語句、指示詞、助詞・助動詞、同語反復・言い換え、応答詞を挙げている。これらの言語形式で展開型、反対型、累加型などの関係を示す。連鎖とは文章全体の構成を把握するために、それぞれの文が文章の中でどういう役割を持っているかを考えるための概念で文章の中での重みづけも考えられている。これは池上のいう卓立性の観点である。統括は文章の中でどの文、もしくは段落が統一と完結の役割を担っているかを確認し、その意味上形態上の特徴をとらえようとする観点である。

日本語学習者の談話の型の上達ということを考えるとき、文章全体のバランス、全体の文章の構

成も最終的には大切であろうが、まず、一つ一つの文が上手につながっていることが求められる。本稿では結束性・接続関係を高めるための言語形式について考えてみたい。

ここで、池上の言う置換および省略、永野の言う応答詞は主に対話の談話での結束性を表す指標であり、今回のような一人で何かまとまった内容を話し続ける談話の分析では余り考慮する必要はないと思われる。また、永野の言う同語反復・言い換えは池上の語彙的手段で表しているものに相当する。語彙的手段は文と文の結束性を表すものの中で一番基本的なものである。その巧拙はもちろんあるが、同一の名詞を繰り返したり、関連ある語彙を持ち出したりすることは、日本語学習の初期の段階から見られる。よって、この手段による接続関係は、OPI で段落ができていないか否かの評価基準としては重視する必要はないだろう。永野の挙げている助詞・助動詞とは「～は」で前の文との対比を示したり、「～も」で付け加えたり、「～からだ」で前の文に補足したりする関係を示すものを言う。これらの示す接続関係は指示詞、接続語句によるものに比べるとかなりゆるいものであると言えよう。以上のような考察の下に今回は、段落の結束性・接続関係をはっきりと表す言語形式として、接続語句、指示詞について分析してみることにする。

さらに、日本語学習者の談話の型が上達してくると、文が様々に関わり合って段落を形成するだけでなく、その文自体にもより複雑な形、つまり名詞修飾や複文文型を使った複文⁴⁾が表れてくる。北條淳子(1989)は話し言葉の中で表れる複文文型を頻度の多いものから挙げている。結束性には関係ないがこの複文の使用についても調べてみよう。

OPI での評価は目標言語が話される社会における運用能力に関してであるので、一般の人に上手に聞こえることが大切である。次に話し言葉の技術に関する分析の視点について考察する。

2-2 上手な話し方の条件—話し言葉の特徴—

話し言葉といっても、日常会話一般から、テレビニュース、会議などでの発言、大学での講義など幅広い。ここでは、テレビ番組「ごきげんよう」⁵⁾で放映された談話を元に考えてみたい。毎回3名のゲストが出演して話すわけであるが、いわゆる話術のうまい人、そうでない人いろいろである。思わず聞き入ってしまうという話術の巧みさはどういうところからくるのであろうか。日本語学習者の中にも、何となく会話が上手に聞こえる人がいるものである。これは話し言葉の特徴を上手に掴んでいるからではないだろうか。本稿では、話の巧みさ・内容の点から資料にある日本人の談話⁶⁾を参考にあげることにした。

半澤幹一(1990)は、話し言葉の特徴を次の4つにまとめている。第一に、「えー」「なんというんでしょうか」「ですねえ」「あのお」「ね」などの文の初めや途中にはさまれる間投詞的表現。これは話し手自身が調子を整えながら次に続けるべき表現を考え、また受け手が内容を咀嚼するという働きがある。小出慶一(1983)は言いよどみの表現として分析している。第二に、「でしょ」「ですよ」「なあ」などの文末表現。これは、受け手に大して直接的に呼び掛けたり、確認・同意を求めたりする働きがある。第三に、反復表現や倒置表現。これは音声言語の場合には表現の順序を時間的にさかのぼって修正できないために起こりやすい。そして、第四に、省略形、音便形、長音形などの話し言葉語彙である。これは音声の発し方に関わるもので、それによる表現効果を狙ったものであるとしている。

この他に、資料の日本人の談話を見ると、独り言的発話や第三者の言葉の引用による効果が指摘できる。これらは話し相手や声の調子を変化させることで話にメリハリをつける働きがあると思われる。これは話の技術としてはかなり高度なものであろう。

以上いろいろな特徴に触れたが、話し言葉の上手さを考えたとき、相手に訴える強さが大切ではないだろうか。相手に同意を求めたり、確認したり、強く訴えたりということは主に文末で行われる。資料の日本人例の文末を見ると、終助詞、「～のだ」、省略など実にバラエティに富んでいることがわかる。話し言葉の技術の一面として本稿では文末表現の種類に注目してみよう。現代日本語コース中級(1988)には談話の諸相という話し言葉の技術に関する解説の部分があるが、そこでも、文末表現は大きく扱われている。

3 OPI で抽出された段落の分析

OPI のテストの資格を取るためには、practice round で10本、certification round で15本のインタビューテープをトレーナーに送り、その評価がトレーナーと同じでなければならない。下位レベルで一段階違っているのは容認されるが、上位レベルを間違えるとテストにはなれない。OPI では、例えば中級の上と上級の下の間には大きな質的な違いがあると考えられているのである。ここで、注意しておくことがある。それは、OPI の評価は機能、内容、談話の型、正確さのすべての面でそのレベルの基準を満たしているという評価であるので、上級と評価されたものは談話の型の面でも上級の要件を満たしているはずだが、中級の上と評価されたインタビューに表れた談話の型が必ずしもすべて中級の域に止まっているとは言い切れないことである。

本稿では、OPI の評価経験豊富なトレーナーによっても追評価されたインタビューテープの中から中級の上、上級の下と評価されたテープそれぞれ3本⁷⁾からある程度の長さで抽出された段落をそれぞれ一つずつ選び出し、書き起こしたもの⁸⁾を分析材料にした。南不二男(1983)は談話の切れ目について、考察しているが、ここでは、話題と表現された形を手がかりとして選んだ。資料のA～Fを参照してほしい。

接続語句については、談話の型が洗練されるほど種類が多くなるのではないかと考えられる。しかし、結果を吟味してみると、

- 日本人の例では4種類の接続語句を全部で12回も使い、
- 上級であるBも3種類使っているが、
- 上級であるAの長い談話の中には一度も接続語句が表れていない。
- 逆に、OPIで中級と評価されたD～Fは、2～3種使っている。

この結果から、接続語句の多さと談話の型の洗練度とは必ずしも比例していないことがわかる。それよりも、どのような接続語句を多用しているかに洗練度が表れているようだ。中級の上と評価されたD～Fは、「でも」「だから」などの簡単な接続語句をかなり頻繁に使っていることに注目してほしい。易しいレベルの接続詞のみで文を関連付けていくのは、かえって幼稚な感じを与えるのではないだろうか。

次に指示詞についてみてみよう。

表1 上級の下と中級の上の言語形式の違い

		日本人の例	上 級 の 下			中 級 の 上		
			A	B	C	D	E	F
接続語句	種類	それで それから だから あと	0	3 そしたら それで そして	2 だけど あと	3 でも だから あと	2 でも だから	2 でも そして
	使用回数	12	0	4	3	9	7	5
指示詞	種類	この その あの	3 そんな その そう	3 その それ そう	2 その そういう	0	1 この	4 あの あれ そんなに それだけ
	使用回数	8	7	3	4	0	3	3
複文	複文の割合	8/23 .35	7/11 .64	6/8 .75	7/18 .39	9/21 .43	5/17 .29	3/20 .15
	節の数	18	13	22	10	11	7	3
文末表現	終助詞	～ね、～よ	—	—	～ね	～ね	—	—
	～のだ	2	1	5	1	2	0	0
	その他	～かな 体言止め	～かな	—	—	—	—	—

- ABCともに「ソ」の文脈指示を使っている。
- Eも指示詞を使っているが、Eの場合は「この町」「この男」という「コ」の指示詞である。
- Fも指示詞を使っているが、「ソ」でさすべき所を「ア」でさしている誤用である。Fはこのほか「そんなに」「それだけ」を使用しているが、これは指示詞的性格の薄いものである。

田中望（1981）は、純粋に照応用法と呼びうるものは「ソ」にしかなく、「コ」の照応用法はダイクシス用法との中間的なものと考えられると述べている。日本語学習者にとってはいわゆる現場指示であるダイクシス用法の指示詞のほうが使いやすいためであろう。照応用法いわゆる文脈指示の「ソ」が正確に使えると、経験あるトレーナーの耳には文と文とのかなりしっかりしたつながりができたと聞こえるのではないだろうか。

複文もやはり、談話の型が洗練されるほど種類も頻度も多くなるのではないかと想像される。話し言葉の場合、倒置や省略が多く、また一文に2つ以上の節を含む文もあったので、分析にあたり全体の文の中に占める複文の割合だけでなく節の数も算出した。全体の文の中での複文の割合を見ると、確かに日本語学習者の場合、上級と評価されたものには、複文が多くなっている。

- AもBも全体の6割以上の文が複文になっている。
- それに対してFの段落には複文は「～ことができる」「ことになる」を含めても全部で3か所しかなく、複文の全体に占める割合は1割5分である。
- Eも3割程度と少ない。

- CとDは、4割程度である。

しかし、日本人の段落を見ると3割5分と、極端に複文が多くないことにも気づく。話し言葉では、書き言葉に比べて一文が短かく一般的に言って複雑な構文は現れにくい。資料の日本人例も分かりやすさを重視し複雑な構造ではなくなっているものと思われる。ここで資料のBの段落を見ると、節は22か所もあり、分かりにくい部分も多い。ある程度の複文は使いこなせなければならないが、複文が使えるようになったら、必要なところのみで使うように指導することを忘れてはならない。

次に話し言葉の技術的側面として、終助詞を含む文末表現の多様さを見てみよう。

- Aは、終助詞は使っていないが、「～かな」「～のだ」を使っておりバラエティのある文末となっている。
- Bは物語を語っている部分での文末はすべて「～のだ」で、バラエティがないが、面接官に尋ねる部分では、普通の「です・ます」を使っている。「～のだ」の正しい使い方が分かっているものと思われる。
- Cは「ね」を多用しており、相手に訴える力の強い話し方になっている。「～のだ」は文中に一回使っているだけである。
- Dの文末表現は「のだ」「ね」共に使用し、かなり洗練されている。
- これに対して、EとFの文末には「です・ます」の決まった形しか表れておらず、典型的な中級の上の談話と言えよう。

この結果から、未熟な日本語話者の場合、特に文末表現に変化が乏しいことが指摘できる。

以上の4つの面からの分析で、Dの段落はEとFとは質的に違うことが指摘できると思う。機能、内容、正確さなどここで扱わない部分のことはともかく、談話の型ではほぼ上級の域に達していると言えるだろう。

以上、OPIで上級の下と中級の上と評価されたものの談話についてその言語形式の違いを、接続語句、指示詞、複文、文末表現の4つの面から分析し、談話の型の洗練されていく過程について考察を試みた。では、談話の型の面で、中級のものがさらに上のレベルを目指すためにはどのような指導をすれば良いのだろうか。

4 結果のまとめと日本語教育への応用

分析の元となる談話例が限られてはいるが、分析結果から次のことが示唆されるのではないだろうか。

1. 単文レベルの段階から一まとまりの段落レベルの談話になるとき、その結束性を高める言語形式としては、「でも」、「だから」などの接続語句の応用がまず起きる。しかし、2つぐらいの特定の接続語句のみでつながれた段落は、典型的な中級の上の段落で、上級の段落とは認められない。接続語句の指導は、多くのものを導入するよりも、文章の中で使えるものを一つずつふやすようなアプローチが必要だ。そのとき、接続語句それぞれの使用頻度、応用難易度も考慮に入れない。

2. 指示詞により結束性を高めることは、接続語句の応用より難しく、特に「ソ」による照応用法が正確にできることは、OPI の談話の型で、中級と上級の違いを測る一つの大きな目安となる。また、今回分析対象とした上級の下レベルでは、「ソ」を含む指示詞を使用していると言っても、特定のものを多用しており、バラエティに乏しい。資料の A は「そんな」を、C は「そういう」を多用している。さらに上のレベルになるためには、それぞれ相応しいものを使いこなせなければならない。照応用法の導入はそれ程難しくはないが、使用させるのは難しい。一連の文章が対象になるからだが、物語を話す・自分の友達について話すなど一つの話題でまとまった話をするような練習が必要である。

3. 今回は複文の数、節の数を調べたにとどまり、複文文型の種類については考えなかった。談話の型が複雑になるにつれ、複文も多く表れるようになる。しかし、複文が非常に多いことが必ずしも、談話の型の洗練度と結びついてはいない。当然のこのようだが、使うべきところで使えるということが大切である。C と D の段落を見ると、他の人の会話の引用が難しいようで、未熟な形になっていることがわかる。もちろん、例が少ないので、一般的にどうかは分からないが、複文を使うべきところで使っていない部分が両例とも同一場面と言うのは注目に値する。日本人の場合はどのように語っているかを紹介するような教材が必要だ。

4. 文末表現については、日本語運用能力が上達するにつれて、終助詞、「～のだ」などを上手に使い、バラエティに富んでくる。しかし、上級の下の例でも中級の上ほどではないが、それぞれパターン化していることがわかる。文末表現については一斉指導ではなく、個々人にあったアドバイスが望まれる。その時、一般の日本人はどのような話し方をしているのかという調査が必要となってくるだろう。

5 終りに

OPI の研修を受けている時、terminal intermediate という言葉を知った。日常会話ができる中級レベルで固まってしまう、それ以上伸びなくなってしまう語学学習者のことを言うのだが、基礎の段階で正確さをおろそかにした学習者に多い。正確さの面だけでなく、内容・談話の型・機能の面で中級から上級に移行するのは、かなり大きいステップのように思う。今回、いかにすれば上級レベルになることができるかということをも明らかにしたかった。分析材料としては、トレーナーによっても追評価されたインタビューテープのみ使用したため、それぞれ3例ずつの分析となったが、談話の型の上達過程についてを概観することができたと思う。

今回は、中級の上と上級の下と評価されたものの段落のみの分析であったが、他のレベルの段落も対象にして談話の型の上達過程についてさらに研究を続けていきたい。

前にも述べたが、OPI の評価は、約30分のインタビューの中で、さまざまな内容の段落の抽出だけでなく、ロールプレイ、学習者による質問などを含むものである。機能、内容、談話の型、正確さの4つの面での言語運用能力を測るためには必要なものではあるが、大学で一教師が行うには、時間がかかり過ぎるという難がある。今回の研究では抽出された段落の一つを対象としたわけであるが、談話の型、正確さについては、学習者の強い点弱い点を指摘できるようである。今後、

会話テストに応用し、学習者がさらに上のレベルを目指すことができるようなアドバイスを与えることができるかよと思っている。

註

- 1) 文章を構成する部分として区分され、それぞれ小主題をもって統一されている文集合と一般的に定義されているが、ここでは、特に、OPI である話題について話された文集合を言う。
- 2) 日本語教育事典 (1982)、口頭能力試験研究委員会によるアンケート用紙 (1992) を参考にした。
- 3) OPI の対象となったもので、必ずしも日本語学習者である必要はないわけであるが、ここで対象としたものは皆学習者であったのでこう呼ぶ。
- 4) 寺村秀夫 (1981) の定義に倣い、いくつかの単文がつながっているものを言う。
- 5) 「ごきげんよう」は、フジテレビで月曜日から金曜日までの午後 1 時から 30 分間放映されている番組で、「恋の話」「今だからゴメンナサイ」「情けない話」などがサイコロの目を書いてあり、サイコロを投げて出た目の話をゲストが話すという番組である。初期の頃は、進行役もただ相槌を打つぐらいであったので、OPI で抽出される談話に近い形の談話が録音できた。しかし、今後日本人を対象として OPI を行い、そこで抽出された段落についても考察したい。
- 6) コメディアンのポール牧が「今だからゴメンナサイ」という題を与えられた時にした話である。
- 7) 筆者が行ったもののほかに友人が行ったものを 2 本対象とした。
- 8) テープを書き起こしたものであるため、発音の面でのそれぞれの特徴は残念ながら割愛せざるを得なかった。また、筆者がインタビューしたものではないテープについては、書き起こす段階でテープのみしか手がかりがなく、多少違えて取っているものがあるかもしれない。

参 考 文 献

- 池上嘉彦 1982 「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育 I』(日本語教育指導参考書 11) 国立国語研究所
- 越前谷明子 1983 「情報を伝える」『話し言葉の表現』筑摩書房
- 小出慶一 1983 「いいよども」『話し言葉の表現』筑摩書房
- 佐久間まゆみ 1992 「文章と文—一段の文脈の統括—」『日本語学』11-4
- 田中 望 1981 「コソアをめぐる諸問題」『日本語の指示詞』(日本語教育指導参考書 8) 国立国語研究所
- 田中 望 1982 「日本語教育と談話の研究」『談話の研究と教育 I』国立国語研究所
- 寺津典子 1983 『談話における照応表現』『言語』12-12
- 寺村秀夫 1981 『日本語の文法 (下)』国立国語研究所
- 長尾高明 1992 「文章と段落」『日本語学』11-4
- 永野 賢 1986 『文章論総説』朝倉書店
- 名古屋大学言語文化学部日本語学科 1988 『現代日本語コース中級 I・II』名古屋大学出版会
- 西田直敏 1986 「文の接続について」『日本語学』5-10
- 半澤幹一 1990 「文章と談話のあいだ」『ケーススタディ 日本語の文章・談話』桜楓社
- 日向茂男・日比谷潤子 1988 『談話の構造』(日本語 例文・問題シリーズ 16) 荒竹出版
- 北條淳子 1989 「複文文型」『談話の研究と教育 II』(日本語教育指導参考書 15) 国立国語研究所
- 牧野成一 1986 「ACTFL 言語能力基準とアメリカにおける日本語教育」『日本語教育』61号
- 南不二男 1982 「談話の単位」『談話の研究と教育 I』国立国語研究所
- BUCK, Kathryn ed. 1989 "THE ACTFL O.P.I. TESTER TRAINING MANUAL" ACTFL

資 料

- 1) 文の切れ目と見なされる箇所は/で示した。
- 2) 原則として「 」内の文は/をつけなかった。
- 3) 話題がそれている箇所は { } で示し、その中の文には/をつけない。
- 4) その段落の話題，テストターの発話は () に示した。
- 5) 接続語句，指示詞は で示した。
- 6) 複文と見なされる箇所は で示した。

日本人

(今だからゴメンナサイ)

僕は、コメディアンの修行のきっかけは、あの高名な大作家はかま光男先生。/それで、はかま先生のお弟子さんはいっぱいいろんな人がいた。/僕もその一人なんです。/まず優等生ですね。/あと萩本欣一さん、それからね、市川信さん、それから僕でしょ。/マ、いろんな人がいますけれど、この三人が一応優等生。/で、この三人、それから、はかま先生の奥様の礼子ママ、この四人がね、同い年なんですよ。/巳年。/だからもうクラス会やってるような感じでね。/で、この三人、それから他にもいましたけれど、コメディアンの修行を、いろいろノウハウを学んでいた時期があったんですよ。/若い頃ね、20代ちょっとぐらいのときだったかな。/エーそれでね、はかま先生が古い自分の洋服を我々貧しいコメディアンにくださったりね、それから、食事連れてってくださったり、いろんな事でお世話になってね。/

その当時、いっぱいいた研究生の中で時計を持っていないのが僕だけだった。/皆時計をしていた。/僕一人持っていないんですよ。/それで、はかま先生のお母様、去年お亡くなりになりましたけれど、僕はお母さまに大変可愛がっていただいたんですよ。/それで、「ボール、おまえだけだね。時計ないの」/元学校の先生やってらっしゃいました、お母様は。/「はい。」/「かわいそうだね。じゃ、私のね、いい時計があるから。おまえさんに貸してあげるから。」と言うんでね。/ま、あるメーカーの高級外国時計をね、僕に貸してくださったんですよ。/マー、僕はほんとに嬉しかったですよ。/「お母様どうもありがとうございます。お借り致します。」と言って、はめて、その日のうちに質にいれて、それで飲みました。/ (エー、ヒドイなどという他のゲストによるざわめき)

A：上の下

(関心を持ったニュース)

アノ、特集で、アノ、扱ったことなんですけど、エー日本で中学生が小学生とかの学生が友達にいじめられて自殺するとか学校へ行きたくないとかそんなことが印象に残っています。/

(最近のニュースは)アノ、先日もそんなことで学生が女子学生が自殺したと聞きました。/(どう思ったか)エート、初めはアノ、韓国と比べて考えていました。/ソ、韓国ではまだ、アノ、自殺とかそんなことが社会問題になっているくらいではないんですが、日本はもっと深刻は感じました。/

(なぜ起きると思うか)私の考えでは、ウーン、勝手なこと・わがままということなんですけど、アノ大人の社会を見てから子供達が育てられて、あのあまりチンジョとか(エッ?)暖かい心を持たないというところだと思います。/(大人の社会を見て?)ええ余りちょっと冷たい感じがしますから。/…固い社会じゃないかな。/(固い?)雰囲気とかアノ大人は特に男性は仕事ばかりしているんです。/そんなことから勉強は何かとかそんな考えて…/そうじゃないかな。/学歴社会といわれてますけど、その事も原因じゃないかなと思っています。/

B：上の下

(何か韓国の昔話を)

アノ、昔ほんとに父とアノ娘が住んでいたんですけど、その娘はほんとに心がアノ優しくて、エー、いい子だったんだけど、父が目が見えない人だったから、仕事がなかったんです。／そし…それで、アノ娘がいろいろな人のうちに行って家事を手伝って、食べものももらって…／アノ、父と一緒に暮らしていたんですけど、アノ、ソー、父が、{アノ、何かオテアラにいる人日本で何と言いますか。(どこにいる人オテアラ?)あのおテラ?(オテラ)}お寺にいる人からゴミを3千ソック…ソックというのは、韓国で昔で使われている、アノ、何か…何というの…キログラムと同じものですけど、3千ソックをオテアラにあげたら、アノ目が見えると、{(何を、ゴミを?)ア?ゴミじゃなくて、これ、(他の言葉で)急に日本語忘れちゃって。あの食べ物。毎日食べるもの。白くて小さいもの。これ何と言う。あ!ごはん。忘れちゃってごめんなさい。御飯じゃなくて、これ。これを3千ソックをあげたら目が見えると}言うことを聞いて、アノ、ほんとに自分もアノ目が見えたらいいと思って、それを娘に言ったんです。／そしたら、娘が、考えて、自分の身体を他の人に売って、これ3千ソックを貰ったんです。／それで、身体を売った言うことは自分がアノ死んだことなので、死んだんですけど、アノ、海の中の、アノ、神様がかわいそうと思って、助けてあげたんです。／そして、アノ、娘も幸せになったし、父も目が見えるようになったと言う話が…/ごめんなさい、日本語がへたなので。／そういう話があります。

C：上の下

(仕事について)

アノ、イギリス人のアメリカ通信の東京支局に働いております。／その仕事は、私、入社したのはソー10か月ぐらいなんですので、まだまだ記者にアノ、なってないですね。／これから、ソー、何か月も、アノ、といますと記者さんですね。／ただいま、アジア全国の記事、東京におって、私アノ編集者ですね。／何か質問があれば、送った支局に聞いてアノ、コンピューターで返事送ったり、貰ったりできますね。／あと、送ります。／記事をアジア全部とニューヨークのAPの本社に送ります。／あとで、大体、アノ、簡単な日本の、何という、一番大切な記事を誰か他の支局の記者さんは誰か、アノ、どれの記事作っているという情報、アノ、ア管理します。／ね、もしアノ、何かテレビで橋本さんは辞任します。／すぐ私、ア、記者さん思い出します。／そういう記事を書いてください。／いろいろ、アノネ、いろいろ記者誰かいるかどうかね、／そういう事をします。／

(誰が書くか決めるのか)ソー、大丈夫ですね。／アジアの編集長は私のずっと目上の人ですね。／良くあるときに彼といっしょに相談しますね。／だけど、簡単な記事だったら、私、直接記者にこのことやってください。／地震とか事故とかいろいろな…/記事の半分くらいはそういう簡単な記事です。／

D：中の上

(アルバイト)

ア、今は、ちょうど一か月前は、友達紹介してもらった旅行会社で少し手伝います。／ウン、だから同じ仕事じゃなくて、前はお客様と直接話したり、／ナニガ、お電話受けたり。／でも、今は日本語がまだへたなんですけど、ちょっと後ろで一日の報告を書きます。／エー、あとね、ソー請求書のチェックして、少し、メイリングのほうがやってます。／何か請求書を郵便で出したり、／ウーあと時々も英語のファックスがいろいろな国で出します。／少し手伝い。／(おもしろそうですね)

あとね、同僚が皆日本人だから、いま話す機会が増えてきました。／前はほんとに学校が皆外国人。／だから、先生しか日本人がいないんです。／友達がいますけど、多くないですね。／あとね、もし先生と話すときが間違えところが先生がナニガ直してもらいます。／友達があまり言わないんですね。／だから、うまくならないんです。／(今はいいですね)今は周りが若い人です。／でも、言葉も難しいですね。／学校で勉強した言葉がと違えますね。／ちょっとおかしいな。／あとね、若い人がいろいろな言葉が全然わかりません。／時々が「何ですか」/／「これの意味ですね」/／「あーそうですか」/／

The Oral Proficiency Interview に表れた談話の分析

E : 中の上

(映画ストーリー)

前の、アノ、名前は、天堂の樂園。/でも、アノ台湾の名前、直接。/ロクエン、楽しいの漢字、公園の園。/樂園/アノ、映画の時間はとっても長い、大体2時間半ぐらいですから。/でも、アノ、内容…映画の内容はスベ…イタリの映画だから子供からずーっと大人になってイッセイイッショウウイッセイ人生イッセイの、何かアノ成長のカイダ…/エエエッ、そうです。/だんだんだんだん大人になりました。/アノ、この間にいろいろなことを経験しました。/そう。/大体アノ一番大切なことはこの男の人は昔から子供からずーっとこの町と一緒に、アツ子供はいつもこの町に住んでいましたが、だんだんだんだん大きくなって、アノ、町もだんだんだんだん変わりました。/だから、20才30才頃外国へ行って、四年間五年間十年間全部あの帰らなかった。/だから、アノ両親父いつもどうして帰らなかった帰らなかった。/心はちょっといろいろな感じがあります。/でも、最後50才ぐらいホントにあの自分の国へ帰ってみると全然違います。/でも、この中にいろいろな感じがあります。/だから、覚えています。/

F : 中の上

(日本のテレビ)

テレビは見ます。/毎週2・3回ぐらいみます。/例えば水曜日とか木曜日とか月曜日と英語の映画をやりま
す。/とか、月曜日の晩8時から大丈夫だあという番組を見ます。/おもしろいと思います。/コメディの漫才の
志村ケンという漫才の番組です。/あの番組の日本語はほとんど…半分くらい意味分かります。/いつも意味分
かります。/エート、あの漫才ジェスチャーをたくさんします。/使います?/でも、そしてだいたい分かります。
/日本語はあんまり分かりません。/でも時々新しい言葉を習います。/例えば、先週のは我慢できるが習い
ました。/アーでも日本の番組そんなに見ません。/それだけです。/

前は、火曜日の火曜サスペンスドラマを見たことがあります。/でも、あれは前の番組、番組の音楽が好きで
した。/でも、今年から音楽が変わることになりました。/そうです。/